

田口 卯吉著  
日本開化小史  
卷之六

リ伊5

433

6

三指印

共六



田口卯吉著

# 日本開化小史

田口氏藏版

門伊5  
號438  
卷6

同會

政印

日本開化小史卷の六目録

文學進步の景況

文學貨財の進歩常々小遅速ありと雖も大体小於

ては併行を

二千四百年代の文運を撥乱反正二千五百年代の

文運の守成修補

封建開化の性質（上下懸隔重族）

社會を自ら救治を爲す

社會の發達は草木の發達に如く之を發達せしむ

るの方法觀やそ

第十三章

徳川政府の不利なる勤王心の發達

謀反の口實

忠義心の封建制度より利ふるを為りし發達

忠義心の發達して徳川政府の不利とならば

歴史の和學の儒者の勤王心を鼓舞す

勤王心を徳川氏を倒るに足らざる之を倒る外寇

あり

愛國心の勃興

徳川政府の天子の詔を以て開港せんと欲す

此策成らざるに徳川政府之を專決す

諸侯の志士天子を奉じて攘夷を行はんとす

御上洛の失敗

各地騷擾

長藩を討じて勝たず

將軍政權を奉還す

將軍恭順謹慎

輿論坑をべからざる

外交一たび開くるとして徳川氏の制度復た維持

すべからざる

日本歴史小史 目録

日本開化小史卷之六

第十二章

徳川氏治世の開化の現像

田口卯吉著

右の如く外物の有様進歩せしむば心裡の有様亦發達せざるを得ず其景況左の如し

文學の概況

戰國の時、利學の校あり、京師の都に、寺の相、五山の南、澤の禪、寺の福、龍の學、管の領、家の護、のセ、補の利、氏若くハ、管の領、家の護、のセ、所領ありて、維若くハ、管の領、家の護、のセ、戦争見え、暇なき固、此れを、文武の章、のち、

事ハ久しく宣く、僧侶の和の司、所、皆圓時、の交際、不、至、當、社、會、行、就、中、禪、理、尤、道、社、會、行、跡、を、絶、て、凡、為、武、人、多、識、者、の、學、所、行、爲、云、ハ、不、一、程、の、人、英、雄、豪、傑、と、

國 戰

日本開化小史 卷之六 第十三章



明承慶正寛(年)吉家家綱家(將)年四二  
曆應安保永(號)宗繼宣吉綱光(軍)代百千

乱卓書朱鹿コもあ傑て千と雪世澤小威府亦林  
の見外を素必れら各四以山二蕃野かの朱羅  
為多書非行を欺をく百て鹿名山中祭子の山  
り大斥聖其蓋て一年著素あり山時と説子の  
小思學經も宋尋方代ハ行り江皆あ小ふと春  
壅ふ或蕃要深儒所常の振初此戸經我當り其  
塞に問山録くの謂讀振初此戸經我當り其  
せ久等のと奉説活書ひり四共小濟備り學徳子  
ら顔集著せは儒のき小子は當く軍井以土愈川鳳  
社くふ義しを於人ほ當く軍井以土愈川鳳  
た戦ふ和程山けふ小俊り二學正く熊佐政岡

卷六 第十二章

於祇新直闇弟代なそと侯来此ら輩揚菴舉な其始  
て園井方齋のの之水集光り時か皆齋貝々と後  
と南白浅門頭未是戸り固水明而碩五原んり宋  
安海石見ハハ小とのて學戸の學井益小今儒勃の  
積榭室綱る至以文以と小人て大持軒山其の興智  
澹原鳩齋三、りく學く好聘朱其儒軒藤崎重學力  
泊篁巢木宅まて二是學みせ舜著と五井瀨齋のふ小  
齋洲兩下重お是千と問和ら水述以井瀨齋のふ小  
三水森門固甚等)と漢ふ我亦て蘭齋木も盛も至  
宅戸芳と佐多の百盛獎の水國多称州仲下のんれり  
觀と洲と藤子年ん励書戸とせの村順代ふりて

三

寛元慶(年)家秀家(將)年三二ヨ三六二二  
政和長(號)光忠康(軍)年百千リ年十百千

近品より全近 | 儒庵て所詩山とと惺  
江行其書江 | たと五四林宗詩著弘用窩  
聖方起説をの | るふ山天羅とと書むの  
人正ると得人 王 | るの王山称能數羅ら弟  
と藤唱て中 陽 | 此皆長と松そく百山社子  
云樹ふ大江 明 | ふ宋老云永堀部博大學  
ふ世篤王藤 學 | り儒小尺杏我あ學強程山  
人學氏喜樹 | の學朝五庵國石記朱徳  
称のひ王 | の終意称破興川の川  
てて是り明 | 奉林活の大 學氏

朱子學

醫學

記文百名法云其と更小著其との曲  
入の年醫とふ功雖被撰門墜子直  
す續代傳奉蓋偉も詳をい小親頼  
との岡す明を能代岡元と一三慶  
悪人本ふ明を能代岡元と一三慶  
るん抱故朱と醫へ一醫國の相子  
ゆとち好丹丹籍俗把風譯俊續正  
えも二溪溪と士廢の彦て紹  
茲今千皇の必解蒙至然書多家正  
よと四國治とそ生り世とく聲紹







其幕の次顔の世者故延宝は  
年附小名と書く事ハ是  
番は安達三郎左衛門金子  
吉右衛門世所咄高し聲曲  
類纂江戶名所岡清兵衛太  
云ふ浄瑠璃子邊平の程  
と云ふ金時が子い金平の  
子と云ふはけりなり云ひは  
らへてはけり昔が宗朝比奈  
傳へてはけり辨慶時宗朝比  
なぬ様金平の片手比奈  
是らぬ様金平の片手比奈  
も力乱神好語を成る者  
もそ金平の好語を成る者  
かみそ金平の好語を成る者  
ふ事とて喜ぶ程と握り牙と  
知事とて喜ぶ程と握り牙と

元息を李地攬人新  
文養主朱理異井  
の癱とのの言萬  
際小醫醫誌の國  
名至其道の著の  
護ヶ弊其後地勢  
屋遷拘一及  
丹々卑小問  
水々泥穩ひ  
後享泥穩ひ  
藤保姑重

良山の徒稍復古を唱て  
是之於と豪傑迭古起り至  
而之直小和そ吉益東洞小  
一變或ん然れ武断懲失を  
過の或ん然れ武断懲失を  
も皇の國名醫傳古法家と云  
ふ(皇の國名醫傳古法家と云

天文學

貞享の頃保井算哲貞觀曆  
れ誤謬なきを成見し新曆  
と作之と貞享曆と云ふ  
之小次之と貞享曆と云ふ  
如見の諸子皆不曆算の精





諸家と考證を以て其功の北... 諸家と考證を以て其功の北... 諸家と考證を以て其功の北...

と學排撃セリ其門原宇万... 和學 輩善あり 善あり 安井息軒 芳野金陵の川

伎村田春海等本居宣長... 伎村田春海等本居宣長... 伎村田春海等本居宣長...

三田來ふの鶏張文二... 三田來ふの鶏張文二... 三田來ふの鶏張文二...

典不之衣すそ茂る後多らり... 典不之衣すそ茂る後多らり...





表中遺漏尚ほ多し後の人此書を以て棄つべからざるを爲さる希くは裨補せよ

以上の二表小據り小徳川氏の時文學の進歩と貨財此進歩と併行せしこと代知りし然るも其間貨財先づ進みて而して文學之小續るものもあらず文學先づ進みて而して貨財之小次ぎしものもあらず又其時代は就きて考ふる小貞享元祿の時代より其進歩の勢最も速しして其以後少く遲滞し又更に文化文政の項より至るまで次第に増進の勢を示し蓋し社會事物の整然として一列と爲して進行すべし社會の理ふりと雖も其細目より就きて查察も未だ必らずも小遲速な

くんはあらず然るも此事獨り社會の理を於てのみ然るべからざる凡そ外物の理を仔細に講求せざる皆此の如きものあり夫れ惑星の大陽を廻りて遠心力と求心力との關係より出たりもその然る其行道を必らず真圓と爲さざればとみえ思ふべし然るも其行道全く橢圓と爲せり燈火の滅すふて油の盡くるも因るも此れハ次第小暗くなるんとみえ思ふべし然るも其滅するも臨むや却て明光を發する斯の如き類は事物理より於て極めて多し皆力の一様れらるるして遲速強弱あるに基りたるを得ず然らば則ち社會の進歩も社會の理ありと雖も其進歩も緩急遲速あるも勢の免るざる

所なりべし是れ則ち徳川氏の時貞享元祿と文化文政との時と於て最も隆盛を見る所以ならん然れども其全体の成跡を顧みれば足利氏季世の浅ましき有様よりして徳川氏の燦爛きき開化を發せり社會進歩の理亦明らなるや蓋し此等の進歩は嘗て政府に保護を因らす又嘗て外國開化の助を藉らる全く日本社會に内より於て自ら進みしものなり後の世に國事を憂ふもの此二表成熟見せり或る以て干渉保護の迷を解らん歟

蓋し二千四百年代の進歩は人目小耀燦たるものあり儒者より於ては其俊才ふ熊澤了介物徂徠新井白石等の人も非諸に於ては其巧妙なる芭蕉其角等の人もあり佛小於ては其深奥なる深草元政の如きあり狂言作者より於ては其新機軸と幾をも近松門左衛門岡清兵衛此如き所を淨瑠璃に於ては即ち竹本義太夫に如きあり役者より於ては初代團十郎の如きあり皆英邁豪傑の資ありて長く後人の尊崇を受くものなり其貨財上の進歩も極りて著し共小前表に就きて見れば蓋し二千四百年代の進歩を我國戰國の爲り小しく壓下せり此たる文運の太平に時雨を得て俄に勃興したる如き勢を示すものありなり二千五百年代の初より當りて此等の諸子死亡此後を文運稍遲滯の姿ありと

雖も其末小至るに及びて更に駿速の勢を以て第二の  
 進動と現せり儒學小於てハ早く折衷の學出て舊時の  
 固陋ふる諸説と排除し終り山本北山太田錦城中井竹  
 山佐藤一齋頼山陽安居息軒の輩見識と文章と成以て  
 一時と風靡するものあり和學に於ては加茂真淵本居  
 宣長村田春海の輩あり古代の事實と探くり語音を正  
 せり天文学に於ては麻田剛立伊能東河金子半七郎の  
 輩ありて深く天空の外と探くり小説に於てハ京傳馬  
 琴阿多て文筆の巧技と誇まり俳文に於ては也有狂文  
 小於ては風來蜀山の輩ありて一種ハ新文代起り皆博  
 識にして新機軸を出し人なり其他貨財の進歩せり

もの亦極りて著し今特に此等の人物は就て品評と  
 下さん小讀者多くて二千五百年代の諸士を以て二千  
 四百年代の人物は劣れりと為さる歟是蓋し其事業  
 の人目小著しものあり加為りて開化の度に至り  
 てハ二千五百年代を以て優れりと云ふは云ふは云ふ  
 蓋し二千四百年代の諸子々皆創業の人なり其為を評  
 多くて文學上の撥乱反正のあり故に功名人目  
 小著し二千五百年代の諸子に至りてハ其餘を受て  
 其弊と去り其美と勸り以て能く社會に適合せりた  
 り故に其功名前者に及ばずと雖も其智識小至りてハ  
 遙小之に超ゆものありと云ひさるへり殊に小



説俳文其他此時代に至りて創業せしむる極めて多し  
文運に決して退却せしむるありはるるを抑も文明上  
の人物と論ずれば時と一技の優劣に就きて查察せざる  
べからざる然らば則ち二千五百年代の人何ぞ二千四百  
年代の下にあらんや斯く一般の進歩に就て查察した  
るの後更し其開化の性質と略記をへし蓋し以上の開  
化は皆封建制度の下に發したる開化なり故に封建は  
社會に適すべし其形状を存せり今其理由を述べん抑も  
封建社會は小國族領をも所の數多の諸侯あり其次に  
小國數多は階級をも成す所の武士あり其下は小商あり  
工師あり農あり農と工とを固より貧困は種類小なりて

諸侯を固より殷富の種族なり其中間立つ所の士と  
商とく其階級極めて多くして富むるものは王侯に比  
し一く貧乏もれは農工より下なり抑も徳川氏治世  
の文運を斯く種族の需要に基きて世に現はるる所不  
れは其度れ相懸隔する亦極めて多し故に其讀書に於  
て孔孟の書を講せしめたるか為りし六經に明をなす  
祖徠仁齋北山錦城一齋等の如き學士代輩出せしめたる  
りと雖も中等以下の人民に之を以て産と破の基と  
爲し固く之を禁み僅に商賣往来都路今川の類を以て  
其教育に充てざる其和學小に於けりや王侯富豪も古代

の語を貴重し學士と引きて専ら古事記萬葉集等と講  
せしめたるを為し古辭に明なる真淵宣長の如き學士  
と輩出せしめしと雖も中等以下は人民々百人一首  
を以て極度とせり其文章に於ては王侯富豪々専ら漢  
文或重んじ古辭と解するもの代稱揚さしむ之に明  
らふ祖徠南郭の輩と現出せしめたりと雖も中人以  
下も之と解するたふ能はざりき其和文に於ける王  
侯富豪々古事記ありし其奇古れり語を用ひて文章と  
綴るを博識とて尊崇せしむ之に巧みな真淵宣  
長の如きを輩出せしめたりと雖も中等以下は平假名  
此草子に安んぜり其画に於ては王侯富豪ハ賞觀玩味

して始めて能く其趣を解する氣意ありしものと好  
みて南州の画専ら行ひし之を能くするもの池大雅の  
如き或現出せしめたりと雖も中人以下は錦画を以て  
其樂と爲せり其書法に於ては或王侯富豪々唐様と重  
んじ之を能くするは廣澤東江の如きを輩出せしめたり  
と雖も中人以下は皆御家流を用ひたり其器具に於け  
る其居宅に於ては其服飾に於ける其他一切の開化に  
於けるも王侯富豪の用ふる所も其度極めて高く是て  
而して中人以下の用ふる所も其度極めて卑し其  
度の懸隔せるのみならず殆ど性質を異し蓋し社  
會の平等ならはざる社會の常なる尊卑此用ふる所

此の如き草子

相異ならず固より免かるるやうさふ所なきとも封建の時代如く甚しきありあらずと一而して封建を以て太平を致せし事徳川氏の如きも古来各國稀に聞か所なきれ苟も封建の組織小於て如何なる開化の發現もやを詳ふざるは徳川氏の開化を查察するに如くはる一や此の如き學士を發生せんと欲するも望むべからず此の如き器物を發生せんと欲するも得べからず開化の理代窮めんを欲するもの其然る所以に於て最も注意せざるべからざるなり

且つ更に注意をすべきは一事あり封建制度の下に於て發するもの皆封建の性質を稟くる事是なり蓋し酒

封建の源  
も生んず

中より注きたる凡ての米を皆酒と化をす磁石も接を  
し凡ては鐵を皆磁石鐵とふる一封建制度の下に  
發せし凡ての現像も皆封建の性質を得試み小見よ  
徳川氏の内制と各諸侯の内制と全相同し各諸侯の内  
制と各藩士の内制と全く相同し各藩士の内制は各商  
賈の内制と全く相同し各商賈の内制と各伴頭の内制  
と全く相同し是より以下連綿として皆同一皆僕隸家  
來を以て團結して一家を為せしものなり蓋し封建の  
族を重んずるも此あり故に長子を重んじ庶子を輕ん  
じ假令継嗣も愚者ありと雖も綿々と立て一族を以て  
永遠に傳へしめんとの計畫極めて密なり其極や其族



此の如く英雄豪傑の為を所或る其勢と早め或る之と  
 遅延せしむる小過ぎざるを嗚呼此理を推して将来  
 と察せり我國前途の事亦豫知を以て事を得へざるあり  
 且つ夫れ社會の發達の他の有機諸物の發達と異なら  
 ず今草木小就きて之を例せん抑も草木の性を以て又保  
 生避死の天性を存すふを為め其生長も亦疑ふべ  
 からずと雖も之を養ふ一種の方法以て之を以て  
 堅韌ならしむべく以て柔弱れらるるむべく以て長大な  
 らしむべく以て矮小ならしむるべし之と同しく社會開  
 化の發達も亦社會の性を以て之を養ふべし王朝  
 の制度を以て之を養ふと鎌倉政府の制度を以て之を養ふと徳

此の如く  
 英雄豪傑

川政府の制度を以て之を養ふと小因りて文學貨財の風  
 俗人情不至りて皆異様の稟性を得せしむるは是より  
 由りて之を觀る小社會の制度を立つるも此れも恰も園  
 丁の草木と育する如き歟嗚呼如何なる有様と於て  
 草木最も長ずばやを知らず社會發達の如何なる制度  
 の下に於て最も速ふりやを知らずこと難うらむ

第十三章

徳川治世の間勤王の氣れ發せし事

我國開化の斯く進歩せし際ふ於て徳川政府の為め不利あり一元素の發達し來りそのあり其へ如何と云ふ王室を尊ぶの氣風大に増進せし事是なり蓋し徳川家康の禍亂と戡定せしゆりや深く王室の將來に懼るべきものありふり或は知まりされり表面より之を尊重せしむりか如しと雖も内實を全く之を抑へしあり固より戰國潰爛の折ふ比す此を王室に一唾れ勞も自らせらざるを衆庶の尊崇と受け數多し俸領とも得玉ひし事なく此を幸福に度へ天壤啻なりと雖も人智漸く古來の歴史は是非を及ぶ徳川氏も萬般の政

務と親らし王室を全く虚位と擁する如き姿ある代見て王室と舊時より復せんとも志の發する人情の常なり是れ家康の豫り防かんと欲したる所以なり然れども此心の進歩を又一朝一夕の事にあらざりき彼の二千二百九十七年徳川三代將軍治世此時肥前島原に耶蘇宗の亂あり其張本たるその素と大阪の殘黨よりして初より徳川氏の政体を破壊せんとの精神を出てたつものありと雖も其口は藉きて以て人心を固結せしめんと欲する所のその即ち勤王ありて耶蘇宗あり其志姦雄の士其志の成らば或は憤り政府に向ひて干戈を試みんと欲するものは必ず輿論の

投をへさ小投すへし若し夫れ當時の輿論果して勤王  
 小切ふさる何そ敢て之茂口小藉かさらんや然る小其  
 茲より出てすして耶蘇宗小據る以て當時勤王の説世上  
 に洽うらさるしを知りへし其後十四年を経て二十三  
 百十一年に至りて由井正雪丸橋忠彌の亂あり正雪固  
 り死を恐れそして臭名を萬世小傳へんとす此の  
 なれも若し夫れ勤王の説よりて當時小威ふるんふく  
 何そ之を口小藉きて人心を固結せしめはることあら  
 んや然る小其口小藉く所のその之より出てそして却  
 て徳川氏の親藩紀州公に謀反し詭を是れ又以て勤王  
 の説未だ盛んふるはるしを知りへし然るは其後太平

久しく打ち継ぎしうは當時の世体は最も必要なる教  
 則訓言の自ら發するを自然の勢を徳川政府の組立  
 と封建制度なる封建制度を破るものゝ不忠此心を  
 故小忠義の教太平此久しき小従ひて社會小發成した  
 り漢學の旺盛小至る小及ひて其碩學鴻儒愈々之を鼓  
 舞せり蓋し孔子の教を素より封建の時より發したる  
 ものを此を其君臣此分義と説くと恰も善く當時社會  
 の結構を鞏固ならしむる小適を此ものあり加之物ハ  
 見るその地位に從ひて異なるものなきを徳川時代  
 小行つたは孔孟の教を忠義の事と切あること却て  
 純粹なる孔孟の教より甚しきものあり如しされ

其所謂忠なるものは君に為りし其身に顧みざるは意  
なり其所謂孝なるものは父の為りし其痛苦に厭つた  
の謂ひあり蓋し是も中庸を得るはも然るはあり  
る一然れとも封建制度を維持するも然る全く此心  
なきも時世の移るに從ひて此心愈々盛んたり然り  
而して英雄豪傑は士大夫此心を鼓舞するものなきに  
あらず二千三百五十二年の頃水戸黄門光圀大に此氣  
風を鼓舞せり蓋し光圀の主義たり王室を尊崇し皇統  
の正經を立て佛教を排し臣民の分義を明らざるは  
あり故に大に我邦の古籍を集り以て大日本史禮義類  
典の類を作らるる又朱明の遺臣朱舜水を重聘して漢

光圀の主義

籍を勧り孔孟の儒道は據りて頗りし忠義の教を奨励  
せり然り而して最も社會の人心に大感覺ありと楠  
氏の墓と湊河に建てて嗚呼忠臣楠氏之墓と記せし事な  
り是より先き楠氏の名望未だ世に顯るを唯一二の儒  
者舊史を讀み其事跡を見て之に欽慕するありのみ然  
るに光圀の楠氏に墓を湊河に建てしは村童牧兒も  
楠氏の人となりと知り勤王と人事の最も榮譽ありと  
これに事代解せり其後久しうして二十三年六十年  
に至り赤穂の臣其主の爲りし怨みを報せし事あり其  
事情の憐むべきと其進退の整備ありと小因りて海  
内一般其人となりを慕へり俳諧師も俳諧を讀み戯作



者く忠臣蔵を作り儒者々義人録と著し歌人詩人各々其長を以て其行為を賛美せり而して忠義れ行ひ社會も尊はる時代なまら世人皆其刑に處せらるるたゞ代惜まはるものふうをさ

此時代の前後も當りて彼の徳川氏並に諸侯の内部に起りたる騒動も大に忠孝の氣を鼓舞せり夫れ亂臣賊子の君家を亂は實に封建制度を破潰を以そのれり故に封建制度の時も當りて大逆無道として非斥するもれ之も過くふ彼の姦計を企ててを惡人等を世人舉りて之を惡み其騒動を静めたる忠臣を世人舉りて之を賞したまはる社會の風教を愈に封建制度に適

て發達せり

此時も當りて更に其勢を助くもれあを演劇淨瑠璃小説等の盛んに世も行ひ世に事是を是等のその固より當時社會に風教が變へんと欲するに卓見を以て作り出せりものあらう全く社會の風教を其儘に寫し出せりそのとて見るべきならんは其所謂勸善懲惡の主意たる一も唯當時に行われり世論を示すも過さずと雖も忠義の氣益々勸むものありなり其記する所を見れば上は王室將軍諸侯の事より下は武士商人等の事に至るまで必ず臣僕の内にも惡人ありて其主家を覆し主人庸愚にして而して後忠臣出て

數多の痛苦を嘗め其主家を改復したる此歴史なり大  
凡世人の感覺を發揮するもの此等其著作より甚き  
いふ此等の著作を見聞するものは皆其惡人を見て  
憎み其善人を見と憫み切齒扼腕するに至るその多し  
當時の著作をば惡人と非常の惡善人を非常の善人  
て共し人情小近う、らずと雖も當時の人情又粗なる  
ふしを能く之を感奮せしめ得たりと見えたり  
さりとて社會小行つ、輿論を常し英雄豪傑此首唱し  
なふう如くと雖も其實を當時の一般人民の利益あり  
その小外ならずはれ、忠義の教何故し利益ありし乎  
是れ則ち當時の制度を封建制度にして君臣の關係と

此等の便

以て社會を立てたる折柄を此を忠義の教を最も之と  
維持をば小適す此をあり、これを彼の勸善懲惡れ世の  
教の如きと必し、聖人の作りたるものふとあらうて愚  
夫愚婦の輿論集まり、これと思はる

斯く忠義の説社會を發揚する小及びて大に徳川政府  
の封建制度を衝突する、此結果を發せり、何んとふれり  
我國小於て忠義主義の最も大なるものを徳川氏に盡  
す小あらうして王室を尊ぶるあり、此とて歴史の明ら  
かふ小従ひて一般人民に知らせられたり、彼の光圀  
あり、此固く人心を以て徳川氏に叛かざらんを欲  
するの意あり、小あらう蓋し君に忠を盡す此善事なり

中口政口  
徳川氏に盡す  
善事なり

と知り而して人君の最も貴きものゝ天子に超ゆるふ  
 とを知り故に忠を王室に盡せしそのは尊ひあり亦  
 穂の義士の行為の如き其他演劇小説に記載する忠義  
 の士は行為の如き皆其君に忠なりそのなり其君に  
 忠ふれは封建制度を鞏固なふしと雖も其君は君に  
 忠れざる其事竟ふ如何なりと蓋し忠義の教愈は  
 社會に著しは古昔王朝の盛んありし歴史愈は人智は  
 顕るなりは其所謂忠義の氣を其君に於てせし  
 て君の君に於てすはの正理を事と思はしむし固  
 りを理學の上より論するときは其君は君たるそのを  
 全く我ふに因縁なきものなるなりと雖も人情の感觸

と決して然らざるなり且つや人類貴賤の考を大に其  
 勢を助くるものあり蓋し人情の尊敬する所は親し  
 らぬも此に發するものなり抑も賢不肖の差を左する  
 甚しきものありされは相親をむとふは尊しと思は  
 り、程の人をあらぬものありと其名聲を傳へ聞さ  
 て親しく交り事のならぬときと與床しく思ひ此で自  
 ら人として尊重の念を發せしむりものなり貴尊の念  
死を避くことの天性より發する又生と保  
理由を第四章世四葉に詳なりされは王室の平安の  
 都に在して凡て世間の政務に關係し玉す深く隱退  
 せられざる有様を最も世の尊信を誘くの原因となん  
 り殊に神代荒蒙の時より連綿として正經を傳へ玉ふ

こと當時の歴史を明うが、此を我日本天子のたれなり  
り普天率土王土王臣ふあらば、中葉頼朝等黠猾  
の才を以て王權を攘み終に將軍政府の基を立てた王  
と雖も真正の神權を王室にありとの考へ漸く人民の  
間に發生せり

此事の第一の原因を和學に漸次開々て神道の隆盛  
なりしに始まり蓋し神道の説たりや王室の衰へ鎌倉  
政府興立の頃よりして体裁を為すに至り、後鳥羽院  
の時代十九百年の中頃ト部兼直神道大意と著せり其後度會家  
行類聚神祇本源と著る南北朝の戦争に時北畠親房元  
元集及び神皇正統記と著る是に於て乎神道稍く形体

王宮の衰へ  
るに由りて

と為るそのあり其後足利氏より戦國に移りて神道全  
く衰ふ書の見よへる、徳川氏海内を静定すは、及  
びて儒者よりして我國の古事に注意をもちその兼之を  
研究より林道春山崎闇齋新井白石の輩皆著書あり而  
して闇齋の如きと深く之を信ぜり然り而して和學者  
真淵本居平田等の諸子又熱心之と主張し我國を神國  
と志して神の御子孫とて天位に登り玉ふ世界無比の尊  
き國なりこと代人くに知らむたり斯く神道に進む  
に從ひ皇統を貴ぶの氣從ひて盛んにふれり宗門に熱  
心するもの何れ理論に關せん我皇室の御祖先に神ふ  
りとの一論に迷信して勤王の氣又之より發生せり

忠義の氣よりして終小勤王の氣と發生したり此

氣漸く鬱結し終小高山彦九郎蒲生君平の輩に至りて  
最も王室の凌夷と歎き諸侯不説き士民と鼓舞して身  
命を顧みざるの熱心を示せり  
二千五百年代の末に當りて儒者中又大に此の如き議  
論を主張したる者あり其人誰と云ふ頼山陽則ち其人  
なり蓋し山陽の主張せし所を神道と其主義と異し  
て却て神道と駁撃せし者然るも其王室を尊崇せし  
小至りては遙に之に過ぎたり彼れ新井白石の讀史餘  
論と讀み皇朝の衰へ武權の興立す所以と知り頻り  
之を慨歎し又楠氏の勲功を賞讃して其業の終る成

らざるを哀み徳川氏の政權を擅し王室の虚位を擁  
するを以て時勢の止むを得ざるのと言ひぬるなり  
不論たり蓋し新井白石も古来の俊傑にして能く開  
化の理と知れり故に古来政府の興廢する理を説き  
て徳川氏と經緯せんと云ふなり頼山陽は即ち其事  
實に依りて更に勤王の主義を説き識者或は其行為  
と咎むと雖も亦一世の俊傑と為さしを得る況んや  
日本外史の一たし世に顯れしに海内一般勤王の  
義を知り志士靡然と志て之に向ふの氣を發揮せし  
於てをや真に山陽外史の著書に如きと海内の人心を  
鼓舞せし事古来無雙と云ふべきなり著書と以て人心

と鼓舞をもつを得、此の如きに至るは蓋し又時世の隆んぬに因らすんをあらす

然るとも此時不當りて所謂勤王の氣なるものは未だ以て徳川政府の結構と破壊をるの勢力ありしその不あらざるをあらす然る不慮の事件發出せり其は何ぞや二千六百年代の初め二千五百十三年也米洲の黒船太平洋と越えて我浦賀に著し通商貿易を請求せしふこと是なり是より先き外國の通商を三代將軍の時より固く禁止せられたる海内一般殆んど日本に外に國ありて知らざるを而して唯其名を聞くものを支那朝鮮琉球の諸國にのみありて彼の佛祖に本地に天竺の如き

本行は

と或は天空の外にありしと思惟せし者なり此時に當りて外國數く我邊海に寇せざるありて二千五百年代の後半に至りて外船の我近海に往来するその數くふるは然るとも皆我邊僻の地に上陸するものあり故に唯當時遠大の志ありしものをして之に忿怒せしむるも止まり然るに米船の我に到りや其入り所を則ち江戸近傍の地なり其求むる所は則ち條約を結んで通商せんこと代請ふるあり事大小前者も異なり而して彼れ之を要求するも強迫の意を以てし若し之を許さばれり直ち兵力に上り訴へんと欲する其威を示せり

此の如き人民小對して此の如き事件の發るは最も  
 其膽と破るは不足なきあり王室も直ち小巫祝僧侶  
 小勅して外人の退去を祈り一免幕府へ直ちに炮臺を  
 品川沖小築を諸藩に命じて武備を嚴し且つ其の得  
 失と建議せしめ加之洋語に通するものを以て外國の  
 事情を質さちめたり  
 蓋し深暗の中ありを以て忽ち光輝を見ち直ち  
 小眼を開く能はざる一彼の太平洋中此最ふ一  
 孤島の内小閉居して絶えて海外異邦の人と交通せさ  
 る人民にして此の如き事變小逢ひ其心神の惑亂を  
 るも抑も又理なき小あらはるる第一の恐懼ハ外

この如き事變  
 の起るは

國と交通するに彼れ直ち小我國を奪ふ一は小あり  
 り蓋し愛國の念を國に關する事件の生ヤ一は發  
 するも此れ小忠君の念を君小不利なる事件の萌ヤ一  
 時に起るものなり今や外國將に我小交通を求め我國  
 を奪はんとするは此恐る人心小發し一は憂國の  
 心非常に鬱勃なり蓋し人心を其自ら苦しきと小切  
 切り小自ら慰むるを能はざる其自ら恐るるときは切  
 り小自ら強さう如く云ふそのふり其自ら危るを覺ゆ  
 るときは切り小自ら尊大し一は他の強者を罵詈する  
 ものなり彼の外船の我國に入らば其船艦の巍然と  
 大なる其砲銃器械を整然として精ふ其兵制進退

この如き事變  
 の起るは

の嚴然として静らるる固より以て我國人を懼るるを  
 小足るそのあり我國れ船を片々きふ小舟のみ我國  
 の砲銃も火繩銃のみ我國の兵制ハ二千三百年即ち元  
 龜天正の頃れもののみ故に如何に我を彼より強しと  
 して自ら慰めんを欲するも一も之を慰むべきは點あ  
 りなり唯一の慰むべきは當時盛ん小發達を以て日本  
 と神國ふり日本天子を神孫たり夷狄禽獸と同し  
 らるるの一事小何なり水戸の會澤正志著新論曰く謹  
 按神州者太陽之所出元氣之所始  
天日之嗣世御宸極終古不易固大地之元首而萬國之綱  
 紀也誠宜照臨宇內皇化所暨無有遠通矣而今而荒蠻夷  
 以脛足之賤奔走四海蹂躪諸國眦視跋履敢欲凌駕上國  
 何其驕也地之在天中渾然無端宜如無方隅也然凡物莫  
 不有自然之形體而存焉而神州居其首故幅員不甚廣大  
 而其所以君臨萬方者未嘗一易姓革位也西洋諸蕃者當

其股脛越奔脚走舸莫遠而不至  
也當時此類の文詩極めて多し  
 斯く民間の志士を熱心國事を憂ふふ當りて徳川政  
 府の大權は二百六十餘年間太平に夢を結びた王侯  
 貴族の掌握せし所ふりて彼等と固よりを最初徳川政  
 府と創立したる勇猛なる参河武士の子孫たりと雖も  
 徳川政府の太平を彼等として其精神より身体小至  
 して全く柔弱ならしめたり其の平生交り所ハ多く  
 下臣のみなふを以て外國の使臣に對するも敢て怯臆  
 することなく或は能く之を叱責す所の勇氣を有した  
 り者ありし然れども此輩固より外國交際の何もの  
 なるを知らずなり海關税の何ものたるを知らざりし



あり裁判權の何ものをも知らざり、通商交易の如何ある利益あるものたるやを知らざれば故に第一に開きたる談判を談判しあうすして寧ろ説諭と受けしむれあり今之を抗せんせん兵力に勝つべきなく辨論の勝つべきを諾せんともんか人民の忿怒せんめを恐る是に於て徳川政府の企ては第一の策を當時大に尊信を加へたる所は王室の威を藉り天子の詔を以て開港を行ひ以て一人人民の忿怒代鎮め一人外國の督促を緩ふせんと欲するありては從來天子の詔は常に徳川政府の欲をばまふなり然るに此の如き方略は民間に傳播するや志士皆忿怒

慨歎の餘り寶刀難深洋夷血と謡ふものあり此心扁欲掃戎夷と唱ふものあり今よりして尊攘を議せざるもの國家の奸賊夷狄の醜奴のみと論ずるものあり其極や殆んと全國各藩の志士の憂愁胸に迫りて家を捨て妻子を去り郷里を脱し生死とも顧みず嚴罰をも恐るは東西南北に奔走して偏に其熱心をもる所の攘夷の一論を徹せんと務めたりされど其論又縉紳の内に入らず王室の主義全く攘夷と決定せり而して徳川政府之を翻さんと欲して幾回とれく開港の議を上りたるとも終ふ其意を達する能はざりしを是時、當りて徳川十四代の將軍家茂尚幼よりして一切

の政權皆大老井伊直弼の手よりあり此人王室に説く此  
 為すべからずはた我知りはるるて鎖港攘夷に迎へ行ふ  
 應うらさふと思ひよる王室の許さるるも吾能く之  
 を決行せん諸侯の服せさばも吾能く之を伐壓服せん民  
 間の志士の罵くも多も吾悉く之を鏖殺せん今日此日  
 本決處を以て唯此一方ふありと決断し終る外國と假  
 定約を結ひた玉實に二千五百十八年なり  
 天下の志士は此舉措を見て皆憤然と志て恐れ忿然と  
 志て怒りて曰く徳川氏を吾人を以て外國の奴隸たら  
 せむふそのふり天子此命を背き日本國を陸沈せしむ  
 るそのなり」と罵然之を非作志て皆心を王室に歸せり

假修り

直弼謀りて之を知り乃ち一網に打盡しつり是れ世  
 論益々之を怒り二百餘年人望の係り政府も復一人  
 の之を慕ふを能く至るに實に開港は止むを得ざ  
 るを知り俊士と雖も亦之に服せざるその多うき  
 此の如き時ふ當りて此の如き舉動を行ふ人の良死  
 を遂なさるる社會に理なき故に直弼遂に一私怨の為  
 め小水戸藩士の手で死せり然れども彼既に徳川政府  
 と一身とを犠牲にして外國と條約を結ひ以後如何ふ  
 る鎖港論者の政權を執るも容易ふ之を決行する能は  
 るらるるを蓋し亦國家に大功ありと云ふべし  
 是より先き天下の諸侯及び志士を徳川政府の終る頼

むへうらふと見て、皆悉く王室に向ひ之を據りて以て鎖港攘夷と行ひ我神國と志て夷狄の奴隸たるを免れちめんとせり。是に於て直弼等私に思へらく、徳川氏の入望と恢復し海内と志て静寧に歸しむべし。唯公武と志て合体せしむれば、一事ありと、則ち皇妹東下の議と奏せり。直弼死す。その後老中等庶政と一新し諸侯の妻孥と其國へ歸し、且つ公武の合体を希望し、終に將軍として上洛せしめ、諸侯と京師に集り、天子は目前に於て開鎖の一論を決せんと企てたり。若し之を行ふの人として賢良ならん、斯の如き企ては當時に於て或る適合すべしものならん。然るも其

人の適せば、何れ如何せんや。夫れ徳川氏三代以後天下の政權を專握し、そのを決して之が政權を執りしもの、賢良なきに因りてあらはるるなり。全く祖先に制定したる組織の完全なきに據り、彼れ關東形勝の地に據り、諸侯の質を擁し、之と大城の内を集めて以て抑制し、その因るなきに故に其静寧に歸したるもの、心裏上の制馭に據り、寧ろ外形上の制馭に據り、その多きをなす。此の如き人と以て、巍然として大城の内と出て開豁する。廣野の外に逍遙し、數く公衆の耳目に接せしめて威嚴地に墜ち、政令遂に行はれ、そのことら防くべからざるの勢なり。是時に當りて徳川

政府の内部も既に人材登用の論ありて復舊時の如きものもあらざり且雖も如何もせん未だ上位も居りもなすも變改す所も至らざるも故も其京師も出て他の諸侯と併列もや復外形上の威嚴以て其勢を添ふ所もなれ故も諸侯弒服せしむるも此勢力も上洛の時も當りて隠然消散せり況んや此時も當りて關西諸國の諸侯の如きも早く既も外國船突入の激動も感して内部の改革を行ひ久く襲来せし門閥の弊も廢し憂國の志士を撰みて國事を任すべし之と應對の際も於ても數も輕蔑を免る所もなれ且王室を以て德川氏も合せしめんと志す企てたる將軍の上洛を

却て德川氏をして王室に屈服せしむるも此媒とあり天子石清水に幸し自ら將軍の節刀を授けて攘夷を行はしむるの大事件を發す所も至れり是時將軍病みて出陣の能はず代理の人亦疾きて出づ能はず由りて其事遂に行はれり且德川氏内部の醜体是も至りて全く世も發露せり且門閥の弊も廢し且其然れども此時も至りて王室に始りて攘夷鎖港の全く行はるる事と知らざるも先も水戸藩最も鎖港と主張し一槁又其議を賛し以て德川氏の政略も抗りたりされり王室も二侯及び其他の諸侯も關東も下りて攘夷と決行せしめたるも皆之を實行

とる能くさりき是亦於て公武合体の目的始めて達す  
を得て而して攘夷鎖港と主張する縉紳諸侯及び民  
間の志士大小勢力を失へり

然きとも徳川氏既に入望と失せり豈久しく海内を制  
するを得んや公武共一開港の主義を執り小及びして鎖

港攘夷と主義とせり民間の志士私小兵を執りて政府  
小抗をばすのあり松本謙三郎吉村虎太郎等中山忠光

郎但馬藩士の京師を騷擾するもれあり長州の人外船小戦ふ

諸侯の私又外國と戦ふものあり長州の人外船小戦ふ  
て之を撃ち馬關と奪ふ之諸侯の内亂政府を煩はるも  
あり先き薩州亦英と戦ふ諸侯の内亂政府を煩はるも  
のあり水戸藩の内亂あり海内多事徳川氏殆んと之

と制馭を能くす而して外國又頻りに償金を促し徳  
川政府は過失を答せたり凡政治の難此時痛く難き者

ありと云ふ而して此等の事悉く之を鎮定するを得  
しりと雖も更に一覺隙の乘るる者を示せり

之より先き長州藩毛利氏數々徳川政府に命を抗した  
り其所謂俗論黨ふもの恭順謹慎の意を致して多く

謀小與る臣下と誅せざるを為し徳川氏々之を寛恕  
せしむると雖も此時高杉晋作れりその出で自ら兵と起

して俗論黨を撃ち闔藩の議論と一新したりを為りた  
徳川氏を兵と發して之を滅せんと欲せり則ち従前の

方法に因り一紙の命を傳へて地を割る若くは封を

移をその能くふと察し征討の師と下ちて勝敗を試  
 みんとせり是時不當りて長州を既し外國と一戦して  
 大小兵制を改めたりされ其戦最も奇觀なりと鎖港  
 攘夷と主張せし長兵ハ悉く洋式を用ひ輕装して銃砲  
 と携へきり開港と主張す徳川氏の命を奉じて攻寄す  
 の諸侯の兵は皆不元龜天正以來家傳の甲冑と着し鎧  
 ひたし鎗と持ち瘡やたふ馬も跨りし其勝敗知るべ  
 きなり若し其れ徳川氏を去て全力と盡すて之に向ふ  
 たり其長州と破りしこと必し然る此時家茂將軍  
 死去し内外多事なり為りし僅し長藩論を兵を  
 退りしめ以て一時を苟安せり又

されり既し人望を失せり徳川政府も更し兵力は弱ふ  
 ることと示し故に茲に至りて徳川氏ハ既し己の政  
 府たるは権力を失ひしを因りて大藩外諸侯を勿論  
 小藩譜代と雖も其命に従はざるもの多かりきはさ  
 土佐侯山内氏其臣として十五代將軍慶喜小説か  
 て曰く泰西人來航以來物議紛然東攻西撃殆んと寧歳  
 たり恐らくも外國の輕侮を招かん是れ政令二途し出  
 て天下耳目の属する所と異しすは為り宜し  
 政權と王室を奉還し萬國と併立するの基礎を立つべ  
 しと將軍其説が容れて政權を奉還せり  
 然りと雖も徳川氏の封領を削りて其臣下の多

鎖港攘夷の一論の如き何そ必志も策の得た  
りもれならんや今日三尺の童子も尚ほ其非なること  
を知りし徳川氏も終始開港を是と志しし一國家  
も大功ありと云ふし然まとも此の如き固陋なる興  
論も尚ほ且壓服す不能つそきて却て自ら倒れし王國  
家の大權を執りしものにして此理を解せざるは徒  
ら社會も風波を生せんのみ徳川氏の如きと好龜鑑を  
社會に遺したるを云ふし然れども外交一たび開きて而して徳川政府の制度を  
永遠に保持するも到底望むべからざるなり蓋し徳川  
氏の制も諸侯及び人民の反亂を防ぐに於て最も緻密

なる所あり故に二百五十年の久き一諸侯の叛くも  
のあふなり然まとも海内連合して外敵に向ふは時  
至りては封建制度の區畫全く無用のもれなり古  
語も曰く同舟颯々逢へば吳越相救ふと故に秦兵強き  
時を亦國連合し佛兵強き時を英日連合す其連合の  
時不當りてや固より六國なく英日のみは外船に  
突入するや日本人民の恐怖せしと實に非常なり故  
に封建の分子を此時早く既破滅し彼の族を重んじ  
るの習氣全く社會を去れり諸侯の内部に於ては皆改  
革を行ひ皆日本國を思ふの人をして藩政を司らめ  
たり此時不當りて此等の人の心裏復其君も忠を盡こ

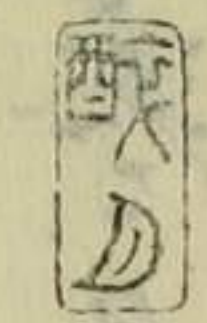
んとの念ありさふり其藩伐愛するれ念ありはるを  
至全く日本國をのみ憂ひて少く更し勤王の志を存  
せしものなき此の如き人物を豈是れ封建の人ならん  
や全く郡縣の人ならんや徳川政府を滅すたる  
に外面より封建諸侯の力れさる如く思ふれども  
其實は愛國の志士封建の遺物なり一團結し因りて其  
目的を達せしありされを徳川政府の滅せし後四年不  
志て明治政府を遂に封建を廢して郡縣と為すは雖  
も海内一人の其君を忠るるのありて之を抗せしは  
となく蓋し之を聞く封建制度は盛んならずや人民愛藩  
の念ありて愛國の心なり敵國外患の強きや愛國の心

ありて愛藩の念ありと今徳川氏に末路愛國の心あ  
りて愛藩の念なきを見れば則ち徳川政府の滅する所  
以て封建の滅すは所以なりを知りて然らば則ち其  
滅するや命なり何ぞ必しも責を一二執政者の過失に  
歸すべけんや



日本開化史卷之六終 今上御田丸御親政の公事

跋



明治復績。百度皆新。天下之事。率取法於西國焉。獨史籍之體。全然仍舊貫。雖浩何補。吾友鼎軒田口君。夙通經濟之學。觀史者。不眼。嘗慨古今史乘之無

日本開化史 卷六 跋

益世道。做西國開化史。著此編。以論我國文物之所以旺。盛者為其博識卓見。非尋常史家之所能及也。嗚呼。此編也。僅數卷耳。亦可謂浩也。然擴而充之。可以歷倒萬卷矣。可以涵染天下矣。豈以

其平素所蘊蓄者。溢而為史也。然則親斯書者。謂君善以學成史。則可。謂君善以史成學。則不可。

明治十五年三月七日

香亭 中根淑識



其平素酒... 淺田... 同十五年十月出版

卷之六

明治十一年二月廿六日版權免許  
同十五年十月出版

著述無出版人

静岡縣士族  
田口卯吉

東京牛込區牛込北  
山伏町四十三番地

東京	日本橋通二丁目	北畠	茂兵衛
書林	同通二丁目	山田	佐兵衛
賣捌	芝三島町	山中	市兵衛
	淺草茅町三丁目	北澤	伊八
	小石川大門町	青山	清吉
	日本橋通三丁目	丸屋	善七
	同通二丁目	小林	新兵衛

